



公立芽室病院 第54号

だより

ホームページアドレス
http://memuro.com
又は芽室町ホームページのトップページから
アクセスできます。

平成17年度 病院経営状況について

事務部長 齋藤明彦

平成17年度の経営状況は、入院患者数が1日当たり108.5人、外来患者数が1日当たり521人でともに前年度に比較し患者数は減少しました。

しかし、平成16年度の1日あたり入院患者数(119.7人)及び外来患者数(538.6人)がともに過去一番多く、平成17年度は平成10年度以降でみると、二番目に多い患者数となります。

入院収益は、11億4,385万円で前年度より6,879万円の減、外来収益では、7億4,399万円で前年度より279万円の増となりました。この収益を1人1日当たりで換算しますと、入院では28,884円(前年度27,758円)、外来では6,273円(前年度6,006円)になります。その他、健診収益、町からの負担金等を含めた総収益は23億5,523万円となりました。

一方、総費用については23億3,748万円で前年度より1,886万円の減となり、この主な理由は薬品・診療材料費などが3,009万円少なかったことによるものです。この結果、収支では1,775万円の黒字決算となったことから、17年度末の累積欠損金(S43年度からH17年度までの経営における現在の赤字額)は、2,200万円になりました。

また、医療機器の購入では超音波診断装置586万円、デジタルX線画像診断装置1,260万円、歯科用パノラマX線装置361万円、上部消化管用ビデオスコープ319万円など4,522万円を投じ26点の機器の更新等を行いました。

次に、平成17年度において当院を利用している患者の割合を市町村別に見てみると、入院では芽室町64%、帯広市12%、清水町・新得町・鹿追町12%、その他十勝管内7%、十勝管外5%となっており、3分の1は

事業収支の状況 (単位: 万円)

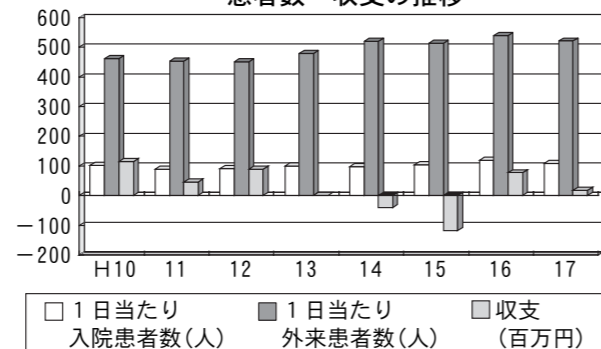
項目	平成17年度	平成16年度	増減	増減率
病院事業収益	235,523	243,355	△7,832	△3.2%
うち医業収益	207,843	215,931	△8,088	△3.7%
病院事業費用	233,748	235,633	△1,885	△0.8%
うち医業費用	221,384	222,747	△1,363	△0.6%
事業収益-事業費用	1,775	7,722	△5,947	
入院				
年間延患者数	39,602人	43,686人	△4,084人	△9.3%
1日当たり平均患者数	108.5人	119.7人	△11.2人	△9.3%
外来				
年間延患者数	118,608人	123,424人	△4,816人	△3.9%
1日当たり平均患者数	521.0人	538.6人	△17.6人	△3.3%

町外の方ということになります。他市町村からの入院が多い外科では、外科の入院患者の65%が町外の患者です。これは下肢静脈瘤の日帰り手術を受けに来る町外の患者が多いことによるものです。産婦人科においても入院患者の60%、小児科も入院患者の50%が町外の患者です。産婦人科、小児科両科の専門医師がいる病院は西十勝では当院のみであり、また、24時間の診療体制をとっている安心な当院に入院しているものです。外来患者の割合は、芽室町71%、帯広市10%、清水町・新得町・鹿追町12%などとなっています。他市町村の患者の多い診療科は、入院と同様な傾向となっています。

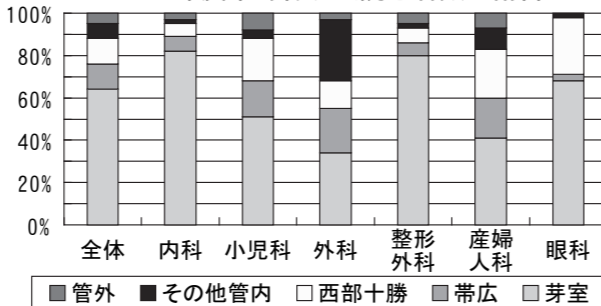
医師確保については、従前から旭川医大、札幌医大、北大医局に要請するなど取り組みを行っていますが、新医師臨床研修制度や地域偏在により3大学の医局においても医師不足であり、本年4月から外科が3人体制から2人体制となりました。引き続き大学の医局を始め、インターネットの利用による募集など医師確保の努力をしております。

さらに、18年4月から診療報酬の改定(3.16%の引き下げ)で病院経営環境は益々厳しい状況ですが、より多くの皆さんに利用されるよう当院の理念である「地域の保健・医療・福祉の中核を担う責任を果たし」、患者様中心の病院であり続ける努力を全職員が一丸となってしていきます。

患者数・収支の推移



H17年度市町村別入院患者数の割合



BFH
Baby Friendly Hospital

**赤ちゃんに
やさしい病院に
認定されました**

本年7月、WHO(世界保健機構)/ユニセフより『BFH: Baby Friendly Hospital(赤ちゃんにやさしい病院)』に認定されました。『赤ちゃんにやさしい病院』とは、WHOとユニセフが、小児保健・子どもの幸せにとってもっとも必要なものは、母乳育児であるという基本理解のもと共同宣言し、1991年から要件を満たしている施設を認定しているものです。

先進国でのBFH認定運動の取り組みの重要性について

私達は、育児をするうえで授乳という行為は、母乳という物質よりもっと大きな意義を持つと理解し、母乳育児は人を育てるための優しさの原点であり、育児の原点でもあると考えています。なぜ今、母乳なのかの意味付けはここにあると思います。

先進国においては「母乳栄養」という視点から、「母乳育児」という視点で認識されなければならないようです。

近年の青少年問題、不登校、学級崩壊も含め、母乳育児の衰退とは無関係とはいえないと考えられています。

先進国である北欧のノルウェー、スウェーデンでは母乳育児の視点にたつて、政府レベルでBFHを推進しており、公立の病院のほとんどが『赤ちゃんにやさしい病院』に認定されています。

日本のBFH認定病院は

現在日本では40施設がBFH認定されています。北海道では勤医協札幌病院、総合病院北見赤十字病院、旭川医科大学病院、公立芽室病院の4施設で、「母乳育児成功のための10ヶ条」を実施して、それらを地域に率先して広めていくことを課せられた施設です。この度、当院もその仲間入りができ、8月には認定式がありました。

次回はBFH認定式の様子などを紹介します。

メタボリックシンドローム vol.3

管理栄養士 楡木由美子

Aさんの4月の栄養指導では、問題点として朝食の欠食、遅い夕食時間とコンビニ食中心の偏った食事、アルコール・脂肪分の過剰摂取に加え、野菜の摂取不足が見られました。

指導内容は「①夕食時間を早くし、寝る前3時間は食べない。②魚の切り身・肉の摂取量に注意(例ほっけの開き1枚→1/4切に)。③毎食最低1品は野菜料理を摂り、きのこ・海藻・こんにゃくも積極的に食べる。④マヨネーズ、揚げ物は食べない・買わない。⑤ゆっくりよく噛んで食べる。」の以上5点です。

今回7月の栄養指導では、改善点として①夕食の手作り料理化への移行②アルコール量の減少③ミニバレー・ゴルフによる運動量アップの3点でした。

今後の目標は遅い夕食時間の見直しと運動後のビール摂取をやめて水・お茶にすること。運動によるカロリーの消費量は少なく、食欲に任せて食べるとかえって太る原因になります。食生活を見直し努力されていますが、リバウンドのないようにこの調子で頑張りましょう。

健診で「肥満」「高脂血症」「高血糖」を指摘される人は多い。食事と運動の調節で健康な体を取り戻せないか。医師・栄養士の指導を受けながら二人がどのように変化していくかを追う。

Bさんは、乳製品の摂取が多いので、牛乳を豆乳に変えることを勧めました。総コレステロール値が下がるなど効果が出ているようですので、継続するよう話しました。

Aさん(54歳♂)			Bさん(45歳♀)		
3月	5月	7月	3月	5月	7月
161	140	119	96	94	92
5.4	5.4	5.4	4.3	***	***
213	221	204	252	260	236
83	84	82	372	115	161
56	53	56	60	75	71
98	***	92.5	77	***	74
85	83.5	83	55	53.5	53
28.4	27.9	27.7	20.9	20.5	20.2